

情報コミュニケーション学への視座⁽¹⁾

A Perspective for Info-Communication Studies

大 黒 岳 彦

1. メディア技術と社会変容

技術によって社会が変わる、とは今更改めて言挙げするまでもなく、幾度となく指摘され言い旧された命題である。産業革命期には種々の紡績機や織機の発明が手工業の従事層に壊滅的打撃をもたらし、蒸気機関の発明は交通網の発達によってそれまでの閉じられたコミュニティーを外部に開くと同時に、年少者や婦女子をも過酷な労働へと駆り立てた。更に時代を下れば、フォードシステムという大量生産技術の普及は、コスト削減によるテクノロジーの大衆化を実現すると同時に大量消費社会を生み出した。現在では、一方では原子力や石油エネルギーに代表される巨大科学技術が環境破壊というリスクをわれわれの社会に突きつけると同時に、他方では遺伝子科学における技術の長足の進歩がわれわれの身体観や倫理観に変更を迫っている。

だが、時代時代の節目に起こるこうした技術変革とそれが惹起する社会への影響関係は実は極めて把握しやすい。それは「公害」や「事故」という社会現象の形をとるにしろ「自殺」や「ストレス」という病理現象の形をとるにしろ明確な「問題」を構成し、そのことによって社会の変化は対象としてわれわれの前に立ち現れるからである。

だが、同じ技術であってもメディア技術の場合には事情が異なる。いわゆる技術がモノの製作や自然の開発という人間の外部的対象に向かう

のに対して、メディア技術は人間と人間との関係、ヒトとヒトの交渉、つまりコミュニケーションに係わる技術であり、そうであるが故に、人間の意識やあり方そのものを変えることで結果的に人間関係のネットワークとしての社会を変えていくからである。こうしたメディア技術による社会変動にはいくつかの特徴がある。まずそれは、①極めて緩慢で漸進的な過程である。これはメディア技術による社会変動が、直接対象へと影響力を行使する一般的な技術とは異なり、社会成員の意識という媒介項を介した間接的な影響行使であることによる。人々はメディア技術によって少しずつ他者との関係の結びつき方を変え、そのことで今度は逆に自己との関係、つまり他者を鏡として形成される自我像をも変えていく。こうして社会的な編成それ自体がゆっくりと相転移を遂げることになる。次にそれは、②無意識的、潜在的過程である。先にも述べたとおりメディア技術は人々の意識そのものを変える。これは即ち、人々にとってはその変化は対象化され得ないということに他ならない。対象の変化を認知するためには意識の同一性、意識の不変ということがその前提をなす。対象とともに意識も変わるのであれば、それは何も変わらないのと同じである。こうしてメディア技術による社会変容は人々の意識から隠蔽されたまま進行する。最後にそれは、③社会総体の全面的構造変動過程である。人間の外部的対象に働きかける技術であれば局所的な変化で済む場合もあり得るが、メディア技術の場合にはその対象が人間関係のネットワークであり、人間関係のネットワークとは即ち「社会」に他ならないために、それがもたらす変化は全面化せざるを得ず、抜本的な構造変動たらざるを得ない。

メディア技術による社会変動についての以上の知見は決して筆者の独断的な認定ではない。多くのメディア論研究者、例えば H.イニス、E.ハヴロック、W.オング、M.マクルーハンなどに代表される英米系のメディア史観グループ、フランスでメディアロジーを組織する L.ドブレ、ドイツの電子メディア論者である F.キットラーなどが、ターミノロジーこそ

違い共通して指摘する論点である。彼らの主張の概要を掻い摘んで纏めておこう。人類史をメディア技術に注目して振り返るとき、大きく時代を画する主導的なメディア技術がこれまで三種類存在した。それが(1)声としての口頭メディア、(2)手書き文字メディア、(3)活字メディア、である。これは単なるメディア技術の進化の指摘や分類の試みではない。彼らの主張の核心は、それぞれの主導的メディア技術を軸にまったく異なる、そして完全に共約不可能な心性や社会構造をもった閉じたメディア・パラダイムが存在したというテーゼである。ある研究者はこのテーゼを箴言風に述べ、別の研究者は緻密な実証研究によって検証し、さらに別の研究者は文学作品や映像、機械類の史料をフーコー張りの系譜学・考古学の方法によって再構成する、といったアプローチの違いはあるもののテーゼそのものは共有されている。そして更に彼らに共通するのは、現代が第四の主導的メディアである電子メディアのパラダイムへの過渡期であり、われわれはそのパラダイム転換の時期に立ち会っており、その渦に巻き込まれている、という認識である。

2. 「情報社会」化の現段階

さて、われわれは活字メディアパラダイムから電子メディアパラダイムへの転換を目の当たりにし、その推移の渦の中に巻き込まれているわけだが、この転換のプロセスこそが普通に「情報社会」化と呼び慣わされてきたものに他ならない。だが、この情報社会のあり方もその初発段階と高度情報社会といわれる現在とを等し並みに扱うわけにはいかないのであって、その展相に応じて少なくとも三つの段階を区別する必要があるように思われる。

第一段階はマクルーハンが「電気メディア」の時代と名づけたテレビジョンというメディア技術を軸に社会が変容・編成された時期である。この時期を特定することは簡単ではないが、テレビ文化がその繁栄の絶

頂期を迎えたと考えられる1970年代を頂点とする四半世紀、つまり1960年代から1980年代がほぼこの時期にあたると考えて大過ないであろう。この時期には、マスメディアの社会や人間に及ぼす効用や影響が盛んに喧伝された。一方でマクルーハンがテレビというメディア技術によって人間のそれまでの視覚優位の感覚配合が、全身体的な感覚バランスへと再編されることを説き、またそのことによって活字文化の分析的・二次元的・個人的・分断的な文化から総合的・三次元的・集合的・連帯的な文化へと社会的構造変動が生じることで将来的にはテレビによって全世界が一つの部族となる「地球村（グローバルヴィレッジ）」の出現を予言した。だが他方、ブーアスティンが真実には存在しないマスメディアによって生み出された「メディアイベント」という幻影によって大衆が踊らされるといったスペクタクル社会における情報操作の危険性に警告を発した。いずれにしても、この時期にはマスメディアが議論の焦点になったことは間違いない。第二段階は技術的にはアナログメディアからデジタルメディアへの転換移行期にあたる。いわゆる「電子メディア」普及期である。この時期にそれまでは社会的には異物でしかなかった電子計算機が、パソコンという名で家庭や日常生活に急速に普及し、テレビと並ぶメディアとしての地位を確立した。これには1995年のマイクロソフト Windows95という GUI オペレーティングシステムの発売や Netscape、Internet Explorer といった WWW 閲覧ソフトの開発といったソフトウェア開発におけるブレイクスルーが大きな役割を演じている。メディアとしてのパソコンは同時にそれまでのマスメディアとは異なったネットワークメディアという双方向コミュニケーションの地平を切り拓いた。「インターネット」である。またこの時期には、IT 革命あるいは情報スーパーハイウェイの名の下に政府主導で電子メディア技術を社会的なインフラとして整備することが目指された。その意味でこの第二段階は、マスメディアとネットワークメディアが競合しつつも、ネットワークメディアとしての電子メディアの可能性やポジティブな側面がとりわ

けクローズアップされた時期といえよう。

第三段階はネットワークメディアである電子メディアの全面的展開期であり、諸他のメディア技術がデジタルメディア、ネットワークメディアとしての電子メディアの下に下属・再編・併呑される時期である。テレビというアナログメディア、マスメディアもまたデジタル化されることでネットワークメディアの一分枝として組み込まれる。また、ユビキタス・ネットワークによって従来はメディアとは考えられなかった家電製品や住居・日用品までもがメディア化しネットワークに組み込まれる。その終着点は人間やモノを含めたあらゆる存在が単一の世界ネットワークという収斂点を目指して統合化することである。だが、ネットワークメディアの全面化は一方で、それに対する反省と反動をも同時にもたらし。世紀の転換点において2000年問題として浮上したネットワークセキュリティを巡る世界的騒動はネットワークメディアが重大なリスクを必然的に抱え込んでいることを象徴する事件だったといえよう。今世紀に入ってから、もはや単なる電子メディアがもたらす楽観的未来像をナイーブに語ることは許されなくなっている。ハッキングやウィルスなどの電子犯罪、ダウンロードやコピーに伴う著作権侵犯、秘密やプライバシーの容易なアクセスや公開によって要請される情報倫理などなど高度情報社会、電子メディア社会が構造的に孕む負の側面が急速にクローズアップされつつあるのが情報社会の現状だといえよう。

こうした情報社会の現状を見据えつつ、メディア技術と社会との係わりを原理的に考察する理論的視座が今、切に要請されている。以下では、「情報」と「コミュニケーション」という切断面から「社会」という構造物を切開することによって先の課題へのアプローチを試みたい。

3. 「情報」と「現実」

まず、「情報」概念の検討から始めよう。

「情報」という言葉を辞書で調べると、例えば次のような意味が記されている。

- 「(1)事物・出来事などの内容・様子。また、その知らせ。
- (2)〔information〕ある特定の目的について、適切な判断を下したり、行動の意志決定をするために役立つ資料や知識。
- (3)機械系や生体系に与えられる指令や信号。例えば、遺伝情報など。
- (4)物質・エネルギーとともに、現代社会を構成する要素の一。」

(三省堂『大字林』)

(3)と(4)はかなり限定的な意味用法であり、日常的には(1)と(2)の意味において使用されるのがほとんどだと考えてよいだろう。だがこの二つの辞書の意味においてはある存在論的な了解が暗黙の裡に前提されている。それは、①まず現実の事物や出来事が第一次的に存在し、「情報」はその現実の事物や出来事のいわば「コピー」として第二次的に存在するに過ぎない、つまり「情報」とは「現実」の影のような存在であること。②次にそうして得られた「情報」は現実における特定の目的に従属しており、その意味において現実に役立つものとみなされていること。

例えば『自由民主党は与党である』という情報においては『自由民主党』という現実世界の存在が前提された上で、その存在に対して『それは与党である』という性格付けがなされており、『現在のインターネット人口は約6億人である』という情報においても、現実世界のコンピュータやPDA、携帯電話などのインターネット端末を所有する者たちの存在が前提された上で、彼らについて『その総数は6億人である』という判断が下される、と一般には思念されている。こうした思念は「情報」が「現実世界」についての断片的な報告であり「現実世界」のコピーであるという先の「情報」理解と相即している。つまり「情報」に先立って現実世界の客観的な事物がまず存在し、「情報」はそうした存在の“写し”であると考えられるわけである。そして“写し”が“写し”であって本物ではない以上、それは常に「間違う」可能性を孕んでもいる。だから

こそ「情報」は同時にその出所を問われ信憑性が吟味されることになる。別の言い方をすれば、リアルなのは飽くまでも現実世界に存在する事物・出来事であり、「情報」はたかだか擬似的なりアリティーしか持たない、つまり“バーチャル”な存在でしかない、ということにもなる。

だが、そもそも「情報」とは区別された現実世界の事物、“写し”の元となる“本物”はどのようにしてわれわれに知られるのか？ 実のところそれは再び「情報」によってしか知る手立てはないのではないのか？

先ほどの例に戻れば、『自由民主党は与党である』という情報において前提されている現実世界の存在『自由民主党』自体が「日本の代表的保守政党である」「党員は全国で150万人に上る」「1955年に結党した」…といった「情報」によって成り立っている。そんなことはない、と反論する向きがあるかもしれない。『自由民主党』という「組織」については確かにそうかもしれない。だが、『自由民主党』を構成する個々の党員、例えば『小泉純一郎』という「人物」や『自由民主党本部』という「建築物」はどちらも物理的存在であり、それらが再び「情報」であることはない、といった反論が当然予想される。だが、案に相違してこれもまた「情報」なのである。その場合はしかし決して『現在61歳である』『神奈川県出身である』あるいは『千代田区永田町に位置する』『8階建てのビルである』といった属性のことをいっているのではない。『小泉純一郎』という人物自体が、『この人物は小泉純一郎である』という情報が社会的に共有されることによって初めて存在しうるのであり、『自民党本部』という建築物自体が『この建物は自民党本部である』という情報が社会的に共有されることによって初めて存在し得るのである。このことは『小泉純一郎』氏が突然タイムスリップして500年前の世界に、つまり『この人物は小泉純一郎である』という情報をまったく共有しない人々によって構成されている社会に投げ込まれるといったいささかSFめいた反実仮想的な想定においては、いくら本人が自分は小泉純一郎だと思っていなくても『小泉純一郎』は少なくとも社会的には存在し得ないことを考えれ

ば得心がいく。『自民党本部』の場合にも、日本国民と例えば象牙海岸の国民とが入れ替わったと仮定したとき、つまり『この建物は自民党本部である』という情報が国民に全く共有されないときには、『自由民主党本部』はそもそも存在しないことはもはや明らかであろう。

こうした考察から明らかになるのは、「情報」が「現実」のコピーであり、その“写し”である、というよりもむしろ、逆に「情報」によって「現実」が構成され編成されているという事実である。そしてまた、「情報」が「現実」に先立つ第一次的存在である点に徴するとき、情報は現実世界における特定の目的に役立つというよりもむしろ現実世界を認識するに際しての枠組みとして、あるいはフィルターとして機能していることである。

4. 「コミュニケーション」と「社会」

次に「コミュニケーション」概念の分析に移ろう。

この語の辞書的定義は次のとおりである。

「人間が互いに意思・感情・思考を伝達し合うこと。言語・文字その他視覚・聴覚に訴える身振り・表情・声などの手段によって行う。」

（三省堂『大字林』）

この辞書の定義においても、また「情報」の場合と同様、ある存在論的な了解が前提されている。それは即ち、コミュニケーションの前提として人間の心的な内容（それは知的・意志的・感情的を問わない）を立て、その外物化（伝播・交換・表出を問わない）としてコミュニケーションを捉えるという了解の図式である。この図式においてはまず、人間の心的内容が第一次的に存在し、その外化として第二次的にコミュニケーションが存在することになり、結果としてコミュニケーションは人間の心的内容に従属させられることになる。

だが、こうした存在了解の下ではコミュニケーションは人間的個体の

地平でしか論じることとはできず、社会とコミュニケーションとの連関は断ち切られてしまう。本節ではこの社会とコミュニケーションとの関係という課題を主題的に扱いたいのだが、それに先立って、社会学の分野において長らく議論されてきた社会と人間的個人との矛盾を巡るシーソーゲームを主題化しよう。

社会学では社会の存在性格を巡って二つの立場が対立してきた。一つは社会は究極的には人間的個人(の心理や精神的習慣としてのエートス)に還元可能であり、単に名目的な存在に過ぎないと考える社会唯名論的な立場、あるいは還元主義的な立場である。方法論的個人主義に立脚して社会的行為を個人の内面から再構成的に理解していくマックス・ウェーバーの理解社会学などがこの立場をとる。他の一つは、社会は人間的個人(の心理)には還元不可能な実在であるとする社会实在論、あるいは全体主義^{ホーリズム}の立場である。社会的事実を人間心理から発生論的に再構成するのではなくあたかもモノのように(*comme de chose*) 所与の事実として考察することを社会学的方法の規準としたデュルケームはこの立場に与すると考えられる。

だが、この二つの立場はどちらにも一理あり、水掛け論的な対立が形を変えて繰り返されてきた。こうした唯名論 vs 实在論、還元主義 vs 全体主義、個人 vs 社会の二項対立に対して社会と個人の関係についての異なる立場を打ち出したのがニクラス・ルーマンのシステム論的な社会観である。

ルーマンは社会を人間的個人に還元するのではなく、さればとて、社会を実体化するのでもなく、コミュニケーションといういわば人と人との「間」に注目し、この「間」としてのコミュニケーションこそが社会の構成要素であると説く。社会とはコミュニケーションの連鎖的接続の別名に他ならない、というルーマンのテーゼにおいて先の課題であった社会とコミュニケーションとの不可分離性と相即不離が基礎付けられる。

但し、ルーマンのいう「コミュニケーション」概念には諸個人の心的内容の外化的交流といったコノテーションはない。ルーマンは人間的個人の地平でコミュニケーションを設定するのではなく、人間を環境とし、人間とは次元を異にする地平にコミュニケーションを位置づける。ルーマンにとって「コミュニケーション」とは、①時間的に生起し、すぐに消滅する「出来事」(Ereignis)であり、②したがって、コミュニケーションは不断に後続のコミュニケーションに接続することで存続する。③そして、こうしたコミュニケーションの連鎖によって生まれたものが「社会」というシステムに他ならない。

社会を人間や人間行為の集積と考えるのではなく、ルーマンの掣に倣ってコミュニケーションのシステムと考えることで初めて社会の発生と維持、変動をトータルに把握・理解する視座が得られる。

5. 情報コミュニケーション過程

以上の分析と考察によって、情報社会への新しいアプローチの可能性が拓ける。そこにおいて社会は「情報コミュニケーション過程」というダイナミズムのなかに位置づけられ、その一環として現れることになる。

「情報」と「現実」との関係の分析において明らかになったとおり、現実的世界は事物としてのモノの集積ではなく、むしろ「この人物は小泉純一郎であること」「小泉純一郎は61歳であること」「彼は現在日本の首相であること」「この建物は自民党本部であること」「この建物は8階建てであること」…といった「情報」、すなわち「こと」が織り成す世界である。その意味で「情報」とは何ら現実世界の剰余物でもコピーでもなく、むしろ「情報」こそがこの現実世界を創り上げている当のものなのであり、「情報」が「モノ」に先立つ。そして、「情報」が現実を創り上げているという意味において、社会も含めたこの現実的世界は「情報的世界」であるということができる。

だが他方、「コミュニケーション」と「社会」との関係の分析からは、社会がコミュニケーションの連鎖的接続の別名に他ならないという知見もまた得られた。では、「情報」と「コミュニケーション」は、社会の構成・編成に際して如何なる関係を取り結ぶのだろうか？

われわれの理解では、社会はひとまず「情報」によって構成されている、と言い得る。だが、これは飽くまでも「スタティックな惰性態の相対で社会を捉えた場合には」という限定が付く。社会をある時点で凍結し、一纏まりの巨大な組織体とみなしたときには、それは「情報」の錯雑化的構成態といえる。だが、社会はその本来の姿においてはダイナミックな運動体である。社会は常に時間において生起し、変化し、変動している。一見、変化が無いように見えても、再生産という運動のなかでその同一性が維持されていると考えなくてはならない。そう考えたとき、社会は根源的には「情報」によって、というより、「コミュニケーション」において創発する、というべきであろう。「情報」とは「コミュニケーション」における一時的な繫留点に過ぎず、また「コミュニケーション」の結果として凝結・析出してくるものに過ぎない。そして、この凝結物としての「情報」が次の更なる「コミュニケーション」における出発点を提供することになるのである。

上の事態を、こう言い換えることもできる。「コミュニケーション」はその過程的産物として「情報」を産み出すことによって社会を構造として安定化させる。その意味では「情報」は既存の社会構造の維持にとって極めて重要な機能を果たしているといえる。だが、既存の社会構造が変動するのは、社会がコミュニケーション過程であることに依っている。社会が動的なコミュニケーション過程であることによって、旧い社会秩序は崩壊し、新たなそれに取って代わられることがそもそも可能となるのである。

われわれはこうした「情報」を産出しながら連鎖的な接続を繰り返す「コミュニケーション」のダイナミックなプロセスを「情報コミュニケー

ション過程」と呼びたいのだが、⁽²⁾この情報コミュニケーション過程において社会を捉えるときに初めて社会の真実態の把握が可能となるのではないか。

6. 情報コミュニケーション学と諸学

さて、コミュニケーションが社会を構成するにしても、それだけでは社会が動態的に把握されただけであり、社会の諸相の分節化的存立の構造は未決である。そこでコミュニケーションから社会が創発するその微視的メカニズムの分析が次なる課題となる。

原理的に言って、個々のコミュニケーションのユニットは何を話題・主題としてもよいし、またその話題を中断することも自由である。更に言えば、コミュニケーションの接続そのものが拒否されることさえ十分ありうる。その意味でコミュニケーションは本来、無秩序で離散的で偶有的な性格を持ち、いわばあちこちで生まれては消える泡のような存在でしかない。だが、実際にはそうはならず、コミュニケーションは連鎖的に接続し、整序的に編成されて社会を構成する。ここには何らかのメカニズムが働いていると考えるほかない。われわれはコミュニケーションのカオスを選別的に接続して囲い込むことで閉域を創り出すこうしたメカニズムをルーマンに倣って「コミュニケーション・メディア」と呼びたい。

ルーマンは「コミュニケーション・メディア」として「権力」「真理」「貨幣」「愛」などを挙げるのだが、それぞれのコミュニケーション・メディアが固有の「コード」を持っている。例えば「権力」は「適法/不法」というコードを、「真理」は「正しい/正しくない」というコードを、「貨幣」は「支払う/支払わない」というコードを、それぞれ持つ。それぞれのコミュニケーションはどのコードを用いて事象や事物を観察するかに応じてそれぞれのメディアによって振り分けられる。この振り分けに

よってメディアに応じたサブシステムが社会の内部的閉域として分出する。例えば「権力」というメディアに対応するサブシステムは「法・政治システム」であり、「真理」というメディアに対応するサブシステムは「学問システム」である。「貨幣」メディアに対応するのは言うまでもなく「経済システム」であり、「愛」というメディアに見合うのは家族を含む「親密性のシステム」である。こうして、事象や現象、事物を如何なるコードとメディアで観察するかに応じて、社会機能に応じた専門分化的な社会的サブシステムが生じることとなる。

ルーマンはこうした社会のサブシステムを機能的分化システムと呼ぶのだが、彼が提示したこの理論的構図には極めて示唆に富む重要な知見が含まれている。それは、「法学」「経済学」「教育学」…といった既成の諸学においてもまた、スタティックな「情報」の相でのアプローチと並んで、「コミュニケーション」という動的でダイナミックな観点からのアプローチが存在しうることの示唆である。

これまでの既成の学問体系は「教科書」や「古典」といった「活字」のかたちで「情報」化され、凝結物として固定化され、それが権威として通用してきた。だが、社会のボーダレス化や流動化によって既成の学問体系や権威もまた相対化し流動化しつつある。つまり既存の学問は今、コミュニケーションの現場に差し戻され、コミュニケーションの現場から再度新たに「情報」化的凝結・析出の作業を迫られているといつてよいだろう。つまり「情報」と「コミュニケーション」という視座からもう一度「社会」を精査・観察し、社会諸科学を再編成的することが急務となっている。

2004年度に発足する新学部である情報コミュニケーション学部は、「情報コミュニケーション学」という今までにない新たなディシプリンの立ち上げとその学際的な共同研究を謳っている。もし、「情報コミュニケーション学」が本稿が論じてきたような、社会を「情報コミュニケーション過程」というスタティック＝ダイナミックな複合的プロセスとして考

察する視座・パースペクティブによるアプローチを意味するのであるならば、既存の諸学が「情報コミュニケーション学」の旗の下に参集し、緩やかな連帯を保ちながら歩を進めることは十分可能であり、それどころか極めて時宜に適ったことだと思われる。

〈注〉

⁽¹⁾ 本稿は2003年4月にもたれた第一回情報コミュニケーション研究会での筆者の発表原稿を元に加筆したものである。また、一部の記述は電通国際情報サービスが主催する情報通信論文 ISID 賞に投稿した拙稿『「IT 革命」の真の意味とは何か? ～「サイバースペース」の存在論～』の記述と重複している。

⁽²⁾ この「情報コミュニケーション過程」というアイデアは、著者の発表に対してコメントをいただいた文学部の石川幹人教授の発案に負うことを付記しておく。